



Data

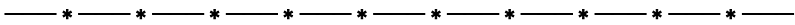
監督・脚本：マリア・ペーテルス
出演：クリスタン・デ・ブラン／
ベンジャミン・ウェインライ
ト／スコット・ターナー・ス
コフィールド

👁️👁️ みどころ

男女平等と職業選択の自由は今でこそ憲法で保障された基本的人権だが、1920年代のニューヨークで、女が「指揮者志望」と発言すると・・・？

アントニア・プリコって一体誰？西本智実は知っていても、世界初のレディ・マエストロが誰か知らなかった私は、本作でそれをしっかりと！映画は勉強。映画から仕入れる知識は大切だ。

カネもコネもない女一匹、いかに夢の実現に邁進していくの？そんな「実話に基づくストーリー」の中、ヒロインに絡む家族、友人、恋人、支援者の人間模様は興味深い。ラストに演奏されるエドガーの『愛の挨拶』を心地良く聴けるストーリー構成と彼女の奮闘努力に拍手！



■西本智実は知っているが、アントニア・プリコって誰？■

今や男女平等は単なるお題目ではなく、社会のあらゆる分野でその実現が図られている。職業選択の自由が憲法で保障された基本的人権であることは明白だが、少し前までそれは女性にとっては絵に描いた餅だった。しかし、今や公務員や民間企業はもとより、弁護士の業界、医師の業界等々でも男女差別は急激に減少し、真の男女平等に近づいている。しかし、マエストロの世界は？

クラシック音楽大好き人間の私は、“炎のマエストロ”と呼ばれる小林研一郎氏の知己を得ているが、近時最も聴いてみたいと願っているマエストロは、大阪出身の女性指揮者・西本智実だ。1998年に京都市交響楽団を指揮して日本国内デビューした彼女は、ロシアを主に活動し2004年にはロシア交響楽団の芸術監督兼首席指揮者に就任。以降、全世

界を股にかけた「レディ・マエストロ」として大活躍している。しかし、本作の主人公アントニア・ブリコって一体誰？

本作が、原題を『The Conductor』、邦題を『レディ・マエストロ』としていることを考えれば、アントニア・ブリコが女性指揮者であることは明らかだが、私は寡聞にして彼女の何を何も知らなかった。パンフレットにある前島秀国氏（サウンド&ヴィジュアル・ライター）の「女性指揮者のパイオニア、アントニア・ブリコ没後30年に『レディ・マエストロ』が公開される意義」によれば、「我々が一般的にイメージする指揮者、つまり欧米の一流オケの指揮台に立ってクラシックの名演を聞かせる指揮者として成功を収めた女性は、本作『レディ・マエストロ』の主人公アントニア・ブリコ（1902年6月26日オランダ・ロッテルダム生－1989年8月3日コロラド州デンバー没）が最初」らしい。12月6日公開予定の山田火砂子監督の『一粒の麦』は「日本で初めての女医、荻野吟子の生涯」を描いた映画だが、本作は女性初のオーケストラの指揮者アントニア・ブリコを描いた映画だ。彼女は1989年に亡くなったから、本年2019年は「女性指揮者のパイオニア、アントニア・ブリコ没後30周年」という記念の年だ。

パンフレットに写るオランダ人であるアントニア・ブリコの顔は、どこか『アンネの日記』のアンネ・フランクとよく似た悲しそうな雰囲気(?)だが、『レディ・マエストロ』本作でクリスタン・デ・ブラーン演じるアントニア・ブリコはなかなかチャーミングな美人マエストロだ。前日に観た『パリに見出されたピアニスト』(18年)はラフマニノフのピアノ協奏曲2番を中心とする音楽は良かったが、ストーリーがイマイチだった。さあ、本作は？

■□■ここまでやるか！このバイタリティはどこから？■□■

私たち団塊の世代が「今ドキの若いモンは！」と言う不平不満の第1は、覇気がないこと。しかし、ニューヨークのコンサートホールの案内係として働いている女性ウィリー（クリスタン・デ・ブラーン）が、休憩中に男子トイレで鏡に向かって一生懸命指揮棒に見立てたおはしを振っているシーンや、オランダの指揮者ウィレム・メンゲルベルク（ハイス・ショールテン・ヴァン・アシャット）の一挙手一投足を間近で見ると、客席の通路の最前列に椅子を置いて座るといふ暴挙(?)を見ていると、彼女のバイタリティ(?)にビックリ！

時代は1926年だから、アメリカ発の世界恐慌が始まる1929年の少し前。日本では1931年の満州事変に向けて軍国主義が強まり、国民の不安が高まっていた時代だ。そんな“暴挙”をホールの経営者で大富豪の息子フランク・トムセン（ベンジャミン・ウェインライト）に咎められたウィリーが「即クビ」にされたのは当然だが、本作導入部では、指揮者になる夢を何としても叶えたいものの、その方法がさっぱりわからないウィリーの、バイタリティ溢れるさまざまな行動が興味深い。その第1は、毎年楽しみにしてい

る無料コンサートを指揮するマーク・ゴールドスミス（ゾーマス・F・サージェント）に対して、彼が指導する音楽学校に入学したいと持ちかけていくストーリー。第2は、ゴールドスミスのレッスンを受ける授業料を稼ぐべく仕事探しをしていたウィリーが、ロビン（スコット・ターナー・スコフィールド）のナイトクラブでピアノ弾きの仕事をもらうストーリーだ。『パリに見出されたピアニスト』では、主人公のふてくされぶりが目立っていたが、本作ではウィリーのとにかく前向きの頑張りが顕著だから、ついスクリーンを覗いている私たちもそれを応援したくなるはずだ。ところが、ところが……。

ある日、ウィリーがゴールドスミスから受ける週3回のレッスンに励み、夜はロビンのナイトクラブで働いていることを知った母親（アネット・マレアブ）が、ウィリーに対して激怒する中、思わず「私は母親じゃない」と口走ってしまったから、さあ大変。私たちは、幼い頃に両親とオランダからアメリカのニューヨークに移民でやってきたはず。それなのに、「私は母親じゃない」とは一体ナニ？ならば、私は誰の子供？私の父親は？母親は？ウィリーは仕事のみならず、家族問題でもそんな深刻な大問題に直面することに。

■■■女が指揮者志望？そんなバカな！失笑の中で彼女は？■■■

『パリに見出されたピアニスト』では、路上のピアニストとアフリカ系ながらもエリート音楽家を両親に持つチェロ奏者の女性との恋模様の展開がいかにも薄っぺらだった。しかし本作では、当初ウィリーの“暴挙”に怒り、クビを宣告してしまったフランクとウィリーとの間に生まれる恋模様がストーリーの大きな軸になるので、それに注目！

ゴールドスミスから週3回のレッスンをつけてもらったことになったウィリーが、ある日誘われて行った旅行先はフランクの家だったから、ビックリ！これは、「一流の音楽家が勢ぞろいする」という言葉に惹かれて行ったものだが、そのディナーの席にはメンゲルベルクの姿もあったから、更にビックリ。そして、ウィリーを覚えていたメンゲルベルクから、「なぜ楽譜を読んでいるのか？」と尋ねられたウィリーが、「指揮者を志望している」と打ち明けると、たちまちテーブルには失笑が。「女性の指揮者は初耳ね」「一人もいない」と出席者の全員から口々に否定されたウィリーの気持ちは如何に……？

もっとも、そんな絶望的状况になってはじめてフランクはウィリーの魅力にき気づくとともに、ウィリーの方もすっかりそれを察したから、失意のどん底にあったウィリーをダンスに誘い軽やかに踊り始めると、自然に2人は口づけを交わすことに。これなら、ウィリーがゴールドスミスから誘われた旅行にやってきた“成果”はあったようだが、そもそもこの2人の価値観は全然違うのでは？すると、そんな2人の恋はうまくいくの？また、ウィリーの指揮者志望の夢と大富豪の息子との恋という“二股かけ”は、ちょっと無理筋では……？

■■■オランダへ！ドイツへ！この行動力に感服！■■■

本作は「音楽もの」。しかも、初の女性マエストロの誕生秘話。そう思っていたが、母親からのあの思いがけない“告白”を受けて、ウィリーは真の母親捜しのためにオランダ大使館通いを始めたから、ストーリーは思わぬ方向に。本作は「Based on a true story」だから、アントニア・ブリコの出生を巡る物語は実話に基づいているはずだ。

オランダ大使館からウィリーの実の母親はオランダで既に他界したという報告を受けたウィリーは、母親の墓参りのためオランダに行く決心を固めるとともに、無謀にもいきなりメンゲルベルクへの弟子入りを頼むことに。ウィリーのこんな姿をみていると、今は本名のアントニア・ブリコと名乗っている彼女の行動力のすごさがよくわかる。ハナから女に指揮者は無理だと考えていたメンゲルベルクは、ウィリーの弟子入りをあくまで拒絶したが、カール・ムック（リヒャルト・ザメル）への推薦状を書いてくれたから、それだけでもありがたい。推薦状を持ってオランダから更にドイツに赴いたウィリーは、カール・ムックからも「女には指揮者はムリだ」と断られたものの、「私は音楽のために人生を捨てます」とあくまで食い下がることによって、カール・ムックの指導を受けることに成功。そして、遂に音楽アカデミーの指揮科に女性として初の合格者になったからすごい。プロ野球界にはさまざまな才能とさまざまなキャラクターに溢れているが、今は引退した元ヤクルト・スワローズの岩村明憲選手の座右の銘が「何苦楚」（なにくそ魂）だった。本作のアメリカからオランダへ！そしてドイツへ！と行動するウィリーことアントニア・ブリコの姿を見て、私はその岩村明憲選手の「何苦楚」（なにくそ魂）を思い出すとともに、この行動力に感服。

さあ、ここまでくれば、後は女性初の指揮者としてのデビューだが、そのオーケストラは何とあの名門ベルリン・フィル。しかし、ウィリーの前にデビューしようとしていた某女性指揮者は激しいブーイングの中で倒れてしまったから、アレレ・・・。そして、ウィリーのデビューについても、新聞は「ふさわしくない」と書き立てていたから大変だ。さあ、アントニア・ブリコのレディ・マエストロとしてのデビューは如何に？

■□■友人は？恋人は？支援者は？興味深い人間模様に注目！■□■

本作では、主人公のウィリーが「私はお前の母親じゃない」とハッキリ宣言されることに見られるように、ウィリーと家族との縁の薄さが目立っている。しかし、その半面ウィリーの周りには友人、恋人、支援者が次々と現れ、興味深い人間模様を展開するのでそれに注目！友人のトップは、ウィリーにナイトクラブでのピアノ弾きの仕事を与えたロビン。そのナイトクラブの中は、でかい顔をした年増女ながら歌としゃべりの魅力で客を惹きつけているベテラン歌手を含めて“曲者”ぞろい。そこには、そんな底辺で生きるミュージシャンが集まっていたからこそ、ウィリーも心地良く仕事ができたわけだ。

1930年にベルリンフィルの指揮台に立ったウィリーは大成功を収め、以降世界初のレディ・マエストロとして大成功。そして、1933年にはニューヨークでウィメンズ・

シンフォニー・オーケストラを開設するまでになったが、本作ではウィリーが女性だけのオーケストラを新設するシークエンスで、このロビン（という男）があつと驚く面白い役柄を果たすので、それにも注目したい。

他方、ウィリーの恋人は、身分違い、価値観違いの男フランクー人だけだから、たまにこの2人の関係が良好になる時もあったが、概ね衝突を繰り返したのはやむを得ない。もともと、世の中には「恋人としてではなく、友人として」という関係もよくあるから、ウィリーとフランクの場合はそれがピッタリあてはまるのかも・・・？そんな2人の人間模様も本作ではしっかりと。

さらに、ウィリーの音楽面での指導者としては、オランダの指揮者メンゲルベルクとは最初から最後まで合わなかったが、彼が推薦状を書いてくれたカール・ムックはよき指導をしてくれたから、カネもコネもないウィリーとしてはラッキーだった。また、本作で興味深いのは、ウィリーがドイツで音楽アカデミーの指揮課に入学してカール・ムックの指導を受けている間の授業料や生活費について某人物からの匿名での支援があったこと。ウィリーはこれをフランクからの支援と考えていたが、それは間違いだった。さて、その支援者は誰だったの？

■最後はエルガーの『威風堂々』ならぬ『愛の挨拶』で■

1930年以降ウィリーはニューヨークを中心に活動を続けたが、1942年以降はコロラド州のデンバーを中心に1948年まで活動を続けたそうだ。本作は2時間19分と少し長いが、本作を観るまで私が全く知らなかったウィリーという女性が成功者になるまでの若き日の姿が実にイキイキと描かれていたため、大いに楽しむことができた。そんな映画のラストは“大団円”と決まっているが、それはどのように？

そう思っていると、本作ラストの演奏会でウィリーが指揮する曲はエルガーの『愛の挨拶』。私はエルガーの『威風堂々』をよく知っているが、『愛の挨拶』も優しく美しい名曲だ。それを本作ラストではタップリと楽しみたい。また、そのみならず、本作冒頭には客席の通路の最前列に椅子を置いて座るというウィリーの“暴挙”をフランクが咎めるシーンが登場したが、ラストではその仕返しをする(?)かのように、フランクがそれと同じ“暴挙”に出るので、それにも注目。今や完全に立場の異なる男と女になっているにせよ、そんな形でレディ・マエストロとしてのウィリーの一挙手一投足を間近で見ようとしたフランクに対するウィリーの対応は・・・？

2019（令和元）年10月17日記